## 追悼

村

上

幸

造

やかであった。同室の「現国」「古文」の教員達からの冷ややかな視 線など全く気にせず、雑談の大輪の花を咲かせていた。 をすることになっていた。「漢文」のテーブルはとにかく騒がしく賑 採点は各分校の教員が一堂に会して科目ごとにテーブルを囲み、採点 る前の時代、関西にも多くの予備校があり、そこはその中でも大きな ていた。 を修了したがまだ大学に職を得られない、三十歳前後の者が大勢集 木村秀海大兄を知ったのは、 分校がいくつかあった。 私は大兄より半年ほど年下である。大手予備校が全国展開す 実力テストが年に数回実施され、 某予備校の講師時代であった。 大学院 その

られた。ただちに某女史は「"喧"御前」と呼ばれることになり、 くなる。それを見て一員、「ここと思えば、またあちら。 すぐに席を立つ。「ちょっとお茶を飲んでくる」と言ってはすぐいな が与えられた。 にその名付け親の人物に、 いだ。でも、若くはないなあ」ということで、「牛老丸」の称号が奉 しかしながら採点は「辛気臭い」ものである。 その体格に因んで「皮下脂肪弁慶」 漢文元締めの老先生、 牛若丸みた の渾名 さら

そういう雰囲気の中で、 ただ大兄は常に訥々としていた。 周りの早

漢字學研究

殷周史研究会として、 これが流れ流れて、形を変え、名を整え、佐藤武敏先生の指導を仰ぎ、 その一人が馬越靖史君である。 いて秀海先生の講義を聴く形で始まった。院生二名が加わってくれた。 社」を名乗り月一回、 に挟まれて私はお茶を啜りつつ、話は纏まった。おこがましくも「鼎 声を掛けてくれた。難波の一酒肆に集い、 一人元予備校同僚の畏友、末次信行君が、三人で研究会を始めようと、 れ育ち、 口の関西弁に付いていけなかったのかもしれない。彼は屋久島で生ま 十年ほど後、 中学・高校の頃に奈良に移り住んだと聞いている 大兄も私も大学の教壇に立つようになったころ、 メンバーを増やしつつ、また入れ替わって、そ 関西学院大学の彼の研究室を会場に、 最初に読んだのは「大豊簋」であった。 酒を飲むこと水の如き二人 金文につ

激されて、 は により、 たいてい彼も読んでいた。彼の挙げる私の知らない話や書籍に刺 ·究会の後の飲み会の席では、大兄は饒舌であった。その博学多識 金文以外でもいろいろと教えられた。 私は「雑学」に励んだ。その彼も今はもういない。 専門外で私が読んだ本

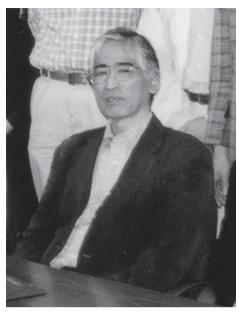
して今の漢字学研究会につながっている。

なり以前、 私の出身大学の先輩にあたるある方が、 冊の書籍

はまだそのようなテーマがない。

あるにはあるが目途がつかない。

てきた」という語があった。衝撃を受け、且つ羨ましかった。自分に上梓された。その本の後書きに、「私はこの書物を書くために生まれ



木村秀海先生近影(2006年5月撮影)

(大阪工業大学教授

附外字部首索引と、君が編んだ『金文部首索引(呉鎭烽 font)』に深謝

を受けてきた。特に拝稽首して、

君が作った『殷周青銅器銘文綜輯

紹介文に書き記したかった。逝くのが早すぎる。蒼天弔まず、嗚呼哀そして私は、「木村秀海君はこの大業を成すために生まれてきた」と海よ、君は金文についての大著を書き上げるはずではなかったのか。

業績は一覧にあるように数多く、

いろいろとその恩恵



漢字学研究会にて ホワイトボードで解説をされる木村秀海先生 (2014 年 6 月撮影)

八